



近江の古城Ⅲ

さわやまじょうあと 佐和山城跡

はじめに

JR琵琶湖線で彦根駅から米原へ向うと右側車窓から美しい逆台形の山が望めます。標高232.9mのこの山が佐和山で、“治部輔に過ぎたるものが二つある。島の左近と佐和山の城”と唄われた石田三成の居城、佐和山城が位置していました。今回はこの佐和山城の歴史と城跡の見どころを紹介したいと思います。

佐和山城の歴史

佐和山城といえば誰しも石田三成のイメージが頭に浮んでくるのではないのでしょうか。しかし佐和山はその立地が犬上郡と坂田郡の郡境に位置しており、江南と江北の境目として、古くより軍事的に注目されるどころでした。一説にはすでに鎌倉時代に佐々木定綱の六男佐保六郎時綱が初めて佐和山城を築いたと伝えられています。戦国時代には京極氏に取って変わった江北の雄、浅井氏が対六角氏の前線基地として佐和山城を利用していたようです。

浅井氏が織田信長に反旗をひるがえし、元亀元年（1570）姉川の合戦が occurs。当時佐和山城には、伊香郡七郷村磯野を本貫地とする磯野丹波守員昌が守将として、敵中を突破して帰城しています。信長は小谷城を攻める前段階として元亀元年7月より佐和山城へ総攻撃を開始します。信長の一代を記した『信長公記』によれば、佐和山城を攻めるため鹿垣を結び、東百々屋敷に丹羽長秀、北の山に市橋九郎左衛門、南の山に水野下野、西彦根山に河尻与兵衛をそれぞれ布陣させたことが記されています。員昌は八ヶ月におよぶ籠城ののち信長の開城勧告を受け入れ、ついに信長の軍門に下りました。

信長時代の佐和山城は丹羽長秀が城代として居城していましたが、元亀2年（1571）8月の朝倉義景との合戦では佐和山城が信長の本陣にあてられました。さらに元亀4年には犬上郡内の材木を佐和山城山麓に運ばせ、大形の軍船を建造しています。このように信長時代の佐和山城は安土築城以前の信長にとって、岐阜・京都間の中継地点として重要な位置を占めていたことがわかります。

豊臣秀吉の近江支配に伴い、天正11年（1583）堀秀政が、天正13年には堀尾吉晴が、そして天正18年には石田三成がそれぞれ城主となります。三成の在城は慶長5年（1600）までの10年間におよび、この間に佐和山城が大きく整備されたものと考えられ、犬上、坂田、浅井、伊香の四郡の百姓に動員がかけられ、「佐和山惣構」の普請がおこなわれました。

慶長5年、関ヶ原合戦で石田三成が破れると、合戦の翌日には早くも徳川家康軍の井伊直政、小早川秀秋の諸隊に攻撃され、落城してしまいました。従来この石田氏の滅亡によ



って佐和山城の歴史も幕を閉じたように思われていますが、落城後、井伊直政が18万石で入城し、慶長8ないし9年の彦根築城までの間、この佐和山城に居城していました。現在二ノ丸を「土佐殿丸」と呼ぶのは、井伊氏の重臣木俣土佐の住居が所在していたことからです。同様に三ノ丸には中野越後が住していたので「越後殿丸」と呼ばれており、佐和山城が最終的に廃城となったのは井伊氏が彦根城へ移ってからのことです。

佐和山城跡の遺構

さて、『古城御山往昔咄聞書集』によると井伊氏は彦根築城後、佐和山城の本丸を「九きゆう間御切落とも云又七間とも申し候」とあるように破城をおこなっています。このため佐和山城跡の遺構も残っていないように思われがちです。ところが山中には随所に城郭遺構が認められます。ここではその見どころを案内していきましょう。

大手土塁

佐和山城の正面、大手口は彦根市側ではなく、鳥居本側つまり東側であったと考えられます。城の東側には東山道（中山道）が眼下に通じており、この付近の山麓に石田氏時代城下町が形成されていたようです。特に佐和山から派生する尾根と尾根に挟まれた谷部をせきとめるように巨大な土塁が見事に残されています。この土塁が大手口の土塁で、土塁にせきとめられた谷部は有力家臣団の武家屋敷や石田一族の居館があったところと考えられます。さらに土塁の外側に添って幅28mにおよぶ細長い水田があり、内堀の痕跡を示すものと考えられます。この内堀と外堀として利用された小野川の間や、小野川のさらに外側に城下町が形作られたのでしょう。現在も彦根城下には佐和町と呼ばれる町があり、佐和山城下の町人が彦根築城にともない移住した町と伝えられています。

二ノ丸、三ノ丸

大手土塁より屋敷跡の水田を通り、谷奥の

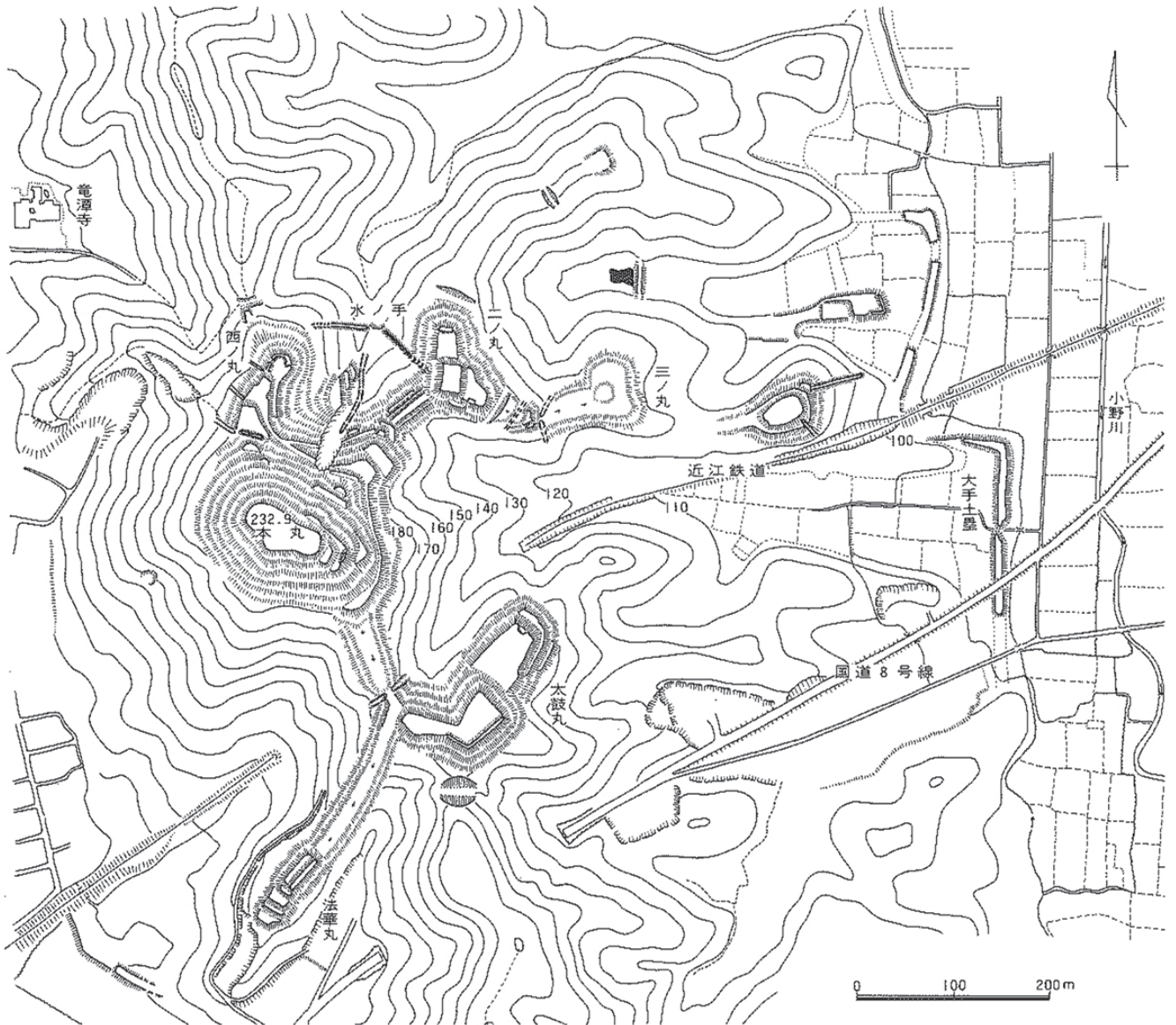
北側尾根上に三ノ丸、二ノ丸が位置しています。三ノ丸は井伊氏時代、中野越後が住していたと伝えられる曲輪くわですが、現在明確な城郭遺構を認めることはできません。この三ノ丸よりさらに西方、尾根頂上に二ノ丸が位置しています。二ノ丸と三ノ丸との間の斜面には3本におよぶ堀切が設けられており、ここに強い防御意識を読み取ることができます。二ノ丸も井伊氏時代、有力家臣木俣土佐が住していたため、別名「土佐殿丸」と呼ばれています。3段に広い削平地をつくり、東の削平地には虎口こぐちが、北の削平地には土塁が認められます。このように二ノ丸は佐和山の東北方面の拠点となる曲輪群といえます。北方尾根上には巨大な堀切を設け、城域を区画しています。

西ノ丸

佐和山西麓には江戸時代になると井伊家ゆかりの清涼寺せいりやうじ、竜潭寺りゅうたんじが建立されています。この竜潭寺の背後から佐和山を登っていくと“竜潭寺越え”と呼ばれる切り通しに至ります。この切通しは佐和山城の北西方面尾根を防御するために設けられた堀切をそのまま利用しているものです。この堀切から本丸に至るまでの部分を総称して西ノ丸と呼んでおり、塩しお櫓やぐら、煙硝蔵えんしょうぐら、金蔵などと俗に呼ばれる削平地が数段残されており、土塁や堀切なども設けられています。

本丸

西ノ丸の曲輪群を登りつめると佐和山の頂上に到着です。広大な頂上は、本丸を切りくずしたという伝承どおり明確な城郭遺構を認めることはできませんが、三角点から南東へ少し下った斜面に石垣遺構が残存しています。石垣は2段分しか残っていませんが、算木積さんきづみの角石すみいしの基底部と見られます。石田三成が佐和山城を改修したのが天正18年ですが、その頃城郭に石垣を用いる技術が飛躍的に発達した時代ですから、おそらくこの残存石垣も、本丸まで幾段にも積まれた石垣の一部分であ



佐和山城跡遺構概要図

ったことはまちがいありません。『彦根山由来記』によると井伊氏は彦根築城に際して佐和山城などから石材を転用したとあります。天正18年の豊臣大名の佐和山城に石垣が認められないのはこの結果といえるのではないのでしょうか。残存する2段の石垣はかろうじて彦根への転用をまぬがれたものだったのでしょうか。さらに転用をまぬがれた石垣が人知れず土中に埋もれている可能性も充分ありそうです。その証拠として本丸周辺の斜面や東北面の腰曲輪などには石垣の裏込めに用いた栗石が多量に散乱しています。また瓦片も本丸付

近に集中して散乱しています。これらの瓦は天正年間に製作された特徴を有しており、石田氏時代の佐和山城は石垣造りであったとともに瓦葺き建物があったことも明らかです。一説には、天守が建てられていたと伝えられていますが、このような遺構や遺物から天守の存在も充分考えられます。

本丸の南斜面には千貫池せんかんいけがあります。山頂に池のあることは千貫にも換え難いことからこの名がついたと伝えられています。

本丸周辺は崩落が激しいですが、北・東面には数段の削平地が認められ、土塁を見るこ



大手の土塁



本丸の残存石垣

ともできます。

水の手

西ノ丸の尾根と二ノ丸の尾根間の谷部に、谷をせきとめるように両尾根から堅土塁が築かれています。谷部には水が流れており、古書にからめてみず掬手水ノ手口てぐちと記されているのはこの谷を指すものと考えられます。

太鼓丸

本丸から南へたてぼり堅堀をへだてて広大な面積を有する2段の削平地があり、上段の削平地には見事な土塁が残存しています。下段の削平地にはさらに数段の腰曲輪が付属し、枡形虎口も認められます。この曲輪群を太鼓丸と呼んでいます。

太鼓丸から南へ延びる尾根上に巨大な切通しがあります。これは「朝鮮人街道」の切通

し道で、中山道鳥居本から分岐して彦根城下に通じていた旧道の名ごりです。本来佐和山城太鼓丸の南面を防御する堀切を切通し道として再利用した可能性は充分考えられます。

法華丸

本丸から太鼓丸へ至る尾根を西南方向にむかうと尾根先端に5段にのぼる削平地があります。最も高所に位置する削平地には東側全面に土塁が残存しています。ここが佐和山城の最南端で、法華丸と呼ばれています。

井伊氏時代に破壊されてしまい、何ら遺構を残していないと思われがちな佐和山城跡ですが、実は山中いたるところに遺構を残していることがわかっていただけたと思います。

このような遺構から盛時の佐和山城は、山頂に石垣を有する城郭を築き、山麓に居館を構え、城下町を形成し、みなと湊を有する近世初頭の巨大な城であったことが容易に想像することができます。それはまさに豊臣家の筆頭大名石田三成の城にふさわしいものだったこと

とでしょう。

美しい山容を車窓からながめるだけでなく、ぜひとも山に登り、終日城郭遺構を見学されることをおすすめします。

(中井 均氏 提供)